29．がん対策推進計画の中で、緩和ケアの一環として「遺族ケア」を行う必要について

○小椋如子（湖東第三小学校）、池田美奈子・日下山三郎・岩崎美喜子（きらら会遺族の部）、
吉田千春・川上賢三・沼波輝（滋賀県立成人病センター）

【研究目的】

がん患者の増加とともに、その遺族も増加していくことが考えられ、今後、患者遺族に対するケアが重要になってくると考えられる。しかし、がん対策基本法および滋賀県がん対策推進計画には、「遺族ケア」についての明記がされていない。本研究で、きらら会（がん患者会遺族の部）で行っている遺族ケアを例に取り上げ、その有効性と必要性を明らかにし、今後の滋賀県のがん対策及び県の施策へ反映させ、全国へ好事例として発信したい。

【研究の必要性】

滋賀県の地域がん登録集計によると、年々がん患者は増加し、現在は一年に約 6,000 人のがん罹患数となり、がん死亡者数も年々増加を続け、約 3,200 人余りとなっている。また、滋賀県がん対策推進計画の全体目標の中で「がん患者およびその家族の苦痛の軽減並びに療養生活のための生活の向上」が謳われ、重点目標でも「2.がん患者と家族への支援として相談支援体制の充実と幅広い情報提供に取り組む」と示されている。がん患者の増加とともに、多くのがん患者の遺族が生み出されているにも関わらず、がん患者や患者家族への支援等の取組に集中し、遺族に対する具体的な支援・対策等の取組は、同計画に位置づけられていない状況にある。

しかしながら、実態としては、多くの遺族が、心のやり場もなく悩んでいることが多く、がんに伴う長く苦しい闘病生活の末、家族（患者）を失った者が著しい精神的苦痛と喪失感を抱えている事例が散見される。このことは、現行のがん対策推進計画の取組（緩和ケア・相談支援センター・遺族会などの情報提供等の取組）は、がん患者の遺族に行き届いていないことを示していると考えられる。

また、現在、拠点病院等において、初期からの終末期までの緩和ケアの重要性が認識されるようになってきているが、今後は、そのことと同時に「患者家族が遺族になっていくまでの緩和ケア」と「遺族になってからの緩和ケア」も併せて切れ目なくつなげていく必要があると考える。

こうしたことを踏まえ、本研究は、現在、滋賀県の「きらら会遺族の部」で行われている遺族サロンの行事や活動を事例として「遺族ケア」の有効性（がん患者の遺族の精神的・身体的な回復等）や必要性を明らかにし、がん対策における遺族ケアの今後のあり方を提示し、考えていきたい。

【研究計画】

(A) 滋賀県及び近府県の遺族である「きらら会（遺族の部)」会員（40 名程度）に対し、「悲嘆尺度　MGM(Miyabayashi Grief Measurement)」を用いて心理・身体の状態についての質問紙調査を行う。また、その結果と遺族サロン・グリーフケア講座・行事（講習会、旅行、食事会等）への参加状況との関連を調べる。

(B) グリーフケア講座の参加者「講座参加の滋賀県民（300 名程度)」(遺族・医療者・一般）に対し、講座後に質問紙調査を行う。

〈実施内容・結果〉

(A) 対象者：滋賀県及び近府県の遺族…「きらら会（遺族の部）会員（40 名程度)」

第 1 回（入会時）と第 2 回（1 年後）の心理身体状態の確認（質問紙調査）

悲嘆尺度 (MGM) で悲嘆に関する質問事項 26 項目について 5 段階尺度で回答を求めた。43 名配布し、有効回答数は 36 部であった。逆転項目については得点を反転して計算した。

表1. きらら会遺族の部における悲嘆の程度の変化

第1回（入会前）		第2回（入会1年後）	
平均値	標準偏差	平均値	標準偏差
108.66	17.06	88.83	24.08

その結果、第 1 回目の合計得点の平均値は 108.66（標準偏差 17.06)、第 2 回目の合計得点の平均値は 88.83（標準偏差 24.08）で、その差は平均値 19.83（標準偏差 20.12）であった。第 1 回目と第 2 回目の平均値の差について t 検定を行ったところ、有意差が認められた（$t(35)=5.91, p<.001$)。よって、悲嘆が軽減されたということができる。

また、セルフケアグループ「きらら会」への参加状況との関係を調べたところ、きらら会の例会（行事・遺族サロン・相談・講座・講習・HP・通信）に参加することによって回復方向にある人は 17 名（47.2%）であり、例会に参加するがすぐには解決できない事情（借金・生活資金不足・持病・病的うつ状態・一人暮しなど）を抱えている人は 7 名（28%）であった。会だけでは解決できない事情を抱えた人は、解決できるまで心理状況が不安定になる傾向にある。

また、セルフケアにあたり、きらら会参加だけでなく、家族・友人知人・医療者・仕事・その他（趣味・ブログ・日記・対話士など）を持って交流することで、回復の相乗効果（12 名 33.3%）があった。

(B) 対象者：グリーフケア講座の参加者…「講座参加の滋賀県民（300 名程度)」

グリーフケア講座質問紙調査（共通項目及び遺族・医療者・一般の各記述回答）結果

①グリーグケア講座 4 回実施

	日時・場所	内容・講師	参加者数
第１回	2010.8.28(土) 滋賀県立男女共同参画センター	「グリーフケアとは」 県立成人病センター臨床心理士　天野可奈子氏	73 名 男性 17 名 女性 56 名
第２回	2010.11.12(土) 野洲市文化ホール	「大切な人の死と　どう向き合うか」 龍谷大学准教授　　黒川雅代子氏	60 名 男性 15 名女性 45 名
第３回	2011.4.30（土） 野洲市文化ホール	①「遺族外来の現場から」 埼玉医科大学国際医療センター教授　大西秀樹氏 ②「遺族を支える臨床期のコミュニケーション」 県立成人病センター緩和ケア科主任部長　堀泰祐氏	112 名 男性 27 名 女性 85 名
第４回	2011 年 7 月 9 日（土） 滋賀県立男女共同参画センター	「グリーフケア　その理解」 京･産業大学学生相談室主任カウンセラー米虫圭子氏	54 名 男性 16 名 女性 38 名

３．アンケート結果と分析

①グリーフケア講座アンケート（回収率）

	回収数（枚）	参加者数（枚）	回収率（%）
第１回	４２	７３	５７．５
第２回	４２	６１	６８．９
第３回	７８	１１２	６９．６
第４回	３５	５４	６４．８

・アンケートの回収率は、全４回すべてが 57%以上であった。

・アンケートの平均回収率は、65.2%であった。

②グリーフケア講座アンケート（性別・立場別）

	第１回			第２回			第３回			第４回			合計
項目	遺族	医療	一般	遺族	医療	一般	遺族	医療	一般	遺族	医療	一般	
全体数（人）	19	19	4	26	13	3	38	25	15	21	10	4	197 人
全体回答率	45.2	45.2	9.5	61.9	30.9	7.1	48.7	32.1	19.2	60	28.6	11.4	
男性(人)	7	4	0	8	3	0	7	4	3	6	2	1	45
各項男女比率(%)	36.8	21.1	0	30.8	23.1	0	18.4	16	20	28.6	20	25	22.8%
女性（人）	12	15	4	18	10	3	31	21	12	15	8	3	152
各項男女比率(%)	63.2	78.9	100	69.2	76.9	100	85.6	84	80	71.4	80	75	77.2%

・遺族…　合計 104 人【男性 28 人(26.9%)、女性 76 人(73.1%)】

・医療者…合計 67 人【男性 13 人(19.4%)、女性 54 人(80.6%)】
・一般…　合計 26 人【男性 4 人(15.4%)、女性 22 人(84.6%)】
・アンケートの回答者の男女比は、男性 22.8%・女性 77.2%で女性の占める割合が 3 倍強である。また、共通項目以外に、次のような記述回答が寄せられている。

★遺族の声：生きることへの意識１《いつ死んでもいい・長生きする意味がない・何にでも執着が無くなった（生への執着・お金への執着)》生きることへの意識２（一日一日が一層大切に思っている・命の大切さが分かる・何事も無理をしないで行こう等）してほしくなかったこと（言葉・態度・行動に傷ついた）してほしかったこと（傾聴）

★医療者の声：遺族への退院後の連絡の必要性・遺族ケアの必要性・医療者の理解が必要・遺族外来の設置希望・院内でケアの必要な人に情報不足・医療者に遺族ケアの知識を機会が必要・遺族ケアの場がない・人手不足・医療者間の連携・遺族ケアの重要性を学んだ等…看護職・相談室からの参加者が多かった。

★一般の声：すべての遺族の方の悲嘆の軽減・ケースの話を聴き、自分を見つめ直す機会になった等

○記述項目より、遺族に関しては悲嘆と回復のための傾聴の必要性、医療者に関しては遺族ケアの情報・知識・人材確保等の声が多かった。

③居地域別

	大津市内		草津管内		甲賀管内		東近江管内		彦根地区		湖北地区		高島地区		（県外）		計（人）
第 1 回	4		11		4		9		4		5		1		4		42
第 2 回	7	37 人	10	42 人	3	10 人	7	27 人	5	18 人	1	15 人	0	1 人	9	47 人	42
第 3 回	18	18.8%	16	21.3%	3	5.1%	6	13.7%	5	9.1%	6	7.6%	0	0.5%	24	23.9%	78
第 4 回	8		5		0		5		4		3		0		10		35

・県内参加者（150 名で全体の 76%である）各管内の平均：10.9%である。
・県外参加者（47 名で全体の 24%である）

④本講座を知ったきっかけ

	案内チラシ	新聞記事	病院から	きらら会から	その他	無回答
第1回	10	14	3	11	3	O
第2回	14	2	3	19	4	O
第3回	20	13	6	34	7	2
第4回	11	6	2	18	4	0
合計	55	35	14	82	18	2

・広報に関しては、案内チラシを拠点病院はじめ県内 45 か所の病院に送付した。

・きらら会からは、HP・メール・チラシ配布・声掛けをしてきた。
・新聞社（京都・読売・毎日・朝日・中日など）には事前取材や行事欄掲載等で協力戴いた。第3回においては、県の広報の「プラス1」にも掲載いただいた。
○結果をみると、参加者は少ない地域もあるが、県内全体に広報出来ている。

４．考察と今後の課題

現在、滋賀県の「きらら会遺族の部」で行われている遺族サロンの行事や活動は、(A)の実施結果より、「遺族ケア」の有効性（がん患者の遺族の精神的・身体的な回復等）が、認められた。よって、セルフケアグループ「きらら会」のような活動団体が各都道府県に１つは必要である。また、諸事情を持った人もいるため、今後は、現在の活動の他に、遺族・県民・行政・医療者・民間団体・専門家など連携して相談できる体制作りも必要である。

滋賀県民に呼び掛けて、遺族・医療者・一般参加のグリーフケア講座4回については、(B)の実施結果より、滋賀県全域からの参加があり、遺族も医療者も講座で学びたいという思いで参加している方が多く、今後は県のがん対策推進計画の中で実施出来るように計画に盛り込んで戴くことを希望する。

この講座では毎回、県にアンケートをまとめて報告してきた。第2回のアンケート結果は滋賀県がん対策推進委員会に提出し、平成23年3月に出された「滋賀県がん対策推進計画中間評価」において、資料P.17「がん医療に関する相談支援及び情報提供」の<評価>では、最終文節に「さらに、がん患者家族のみでなく、遺族に対する支援についても充実を図る必要がある」と初めて「遺族に対する支援が必要」という指針が出された。本研究をすることによって、認められた大きな功績である。今後は、支援の方法について具体的な目標を挙げ、取り組んでいけるように協力していきたい。

(尚、この研究に関して、研究資料及び文責はきらら会遺族の部池田美奈子である。)

経費使途内容	金額
行事費（講座3回・講習会2回・交流会2回）	７０，０００円
会場費（講座会場費3回分・交流会2回）	５７，３６０円
講師費（講座講師３名・講習会講師１名）	１２０，０００円
会議費（きらら会役員会議１回×１２カ月分）	１４，４００円
交通費（講座講師用・役員研修会・行事下見・他）	１２２，６９０円
印刷費（チラシ・資料・通信・他）	０円
通信費（電話FAX代、郵送代、官製はがき、メール便、切手）	５２，１１０円
消耗品費（文具・コピー紙・インク代・写真紙・他）	１２２，３１６円
合　　計	５５８，８７６円